

小学校における音楽の授業に関する報告  
－ 音楽の授業の指導について －

木村みどり・古寺 有希

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第59号抜刷）

## 小学校における音楽の授業に関する報告 — 音楽の授業の指導について —

A report on music classes at elementary schools:

Instruction in music classes

木村みどり・古寺 有希

---

キーワード：伴奏、歌、発声、鍵盤ハーモニカ、リコーダー

---

### 1. はじめに

小学校の教育現場ではどのような音楽の授業が行われ、現場の教師はどのような意識で授業を行っているのか。また、子どもたちに与える音楽教育について教師の考え方、指導の在り方について、現場の教師へのインタビューによって調査した。

本インタビューは『学習指導要領 音楽』（平成20年改訂）にそって授業が行われているか否かの確認をしたわけではなく、教員養成大学で行われている音楽に関係する授業が実際現場でどのように活かされているかを確認し、今後指導する手掛かりにするために行ったものである。

尚、筆者たちが教員養成大学で器楽（ピアノ）を担当しているため、器楽や伴奏についての質問が多くなっている。

### 2. 調査の方法・質問の内容

#### (1) 調査の方法

2013年7月～8月、津山市、美作市、勝田郡、久米郡に勤務する小学校教諭40名（担任、音楽専科、新採用教師、ベテラン教師）にインタビューを行い、ICレコーダーに録音した。

#### (2) 質問内容

- ① 音楽の授業でどのようなことに取り組んでいる

か

- ② 歌、発声について
- ③ 伴奏について（ピアノ・オルガン・キーボード）
- ④ 器楽について（鍵盤ハーモニカ・リコーダーなど）
- ⑤ 鑑賞について
- ⑥ 音楽の授業で困っていること
- ⑦ 新採用で初めて音楽の授業を行った時、どのような感じであったか
- ⑧ 教員養成大学時代音楽関係の授業で学んだこと
- ⑨ ⑧で役立ったこと
- ⑩ ⑧で教えてもらいたかったこと
- ⑪ 初任、若い教師へのアドバイス
- ⑫ 音楽の授業を上級の学年にどのようにつないでいるか
- ⑬ その他
- ⑭ 音楽の位置付け、大切にしていること

### 3. インタビュー調査による現状

今回のインタビューに関しては全国的な規模で行ったわけではなく、筆者たちが勤務する大学周辺の岡山県北部市内、郡部、近隣の市の小学校で行ったものである。

小学校で行われる音楽の授業内容・指導について、またそれ以外の教師の胸中を多く語っていただいた。

教師の話した内容（抜粋）をまとめ教師の使った言葉で記載する。

①音楽の授業でどのような事に取り組んでいるか

- 大きな学年になったら歌わなくなる。声変わりもあるが、楽しくいつまでも歌を歌える子どもになってもらいたい。リズム、楽器もするが歌を中心にしている。教科書の中から適当にピックアップして子どもたちの実態を見ながら。朝の歌をやっているが流行の歌、歌いやすい合唱曲、研修してきて良かった曲を自分の好みで歌わせる。朝それぞれ教室で歌い、月に1回全校で合わせる。
- 1つの曲を何回も歌う。何回もドレミで歌うのが大事だと思っている。子どもの時習った曲がいまだに階名で歌えたり、3番まで歌えたりとか、そういう教育を受けてきたというのがあって、それを心の中に覚えているような事をしてやりたい。教科書でも4～5曲を一気に歌わせ、新しいのをいれたら1曲やめる。そうすると年間多くの曲を歌うようになるので。1年生なら、その中で身体表現が入るようにする。ピアノが駄目なのでCDをかけっぱなしになったりするが、子どもは楽しいと言ってくれる。
- とにかく流れがあるように、飽きないようにしています。これしたらこれって変えて、ほんのちょっとの間とかも手拍子を打ってみたりリズムを打ってみたりとか、飽きないように努力はしています。
- 音楽の時間は専門性もさることながら、先ず子どもをどうやって音楽の時間にルールよく、立ったり、座ったりする学習の規律の方が大切だと思う。実習で学生が燃えて歌わせようと思って来てものがっくりくと思う。音楽、体育、図工はどうやって子どもを動かすかという事を勉強した方が良い。
- 授業の頭が大事。ざわざわしてきて、音楽は気楽でいいのだと思っている子が多い。理科、音楽、家庭科は息抜きの授業、専科の先生はやさしいと思っている。しかも若い先生だと、1回だらっとして終われば次もだらっとなる。音楽ができる人なら最初に今流行っている曲などをピアノで聴かせて、すごい

なって思わせて、ひきつけて、子どもには興味がないかもしれないが、やらせるべき事をそのあとやらないと、子どもはのってこないし、やる人も燃えていたら、生徒指導の方で意気消沈する。

- パターンを決める。歌を歌い、リコーダーをやり、次に新しく習う事をやり最後に歌を歌うとか…リクエスト曲を聞いておいて歌うというような、パターン化している。そうすればだれでもやりやすい。やりやすいし、子どもも分かりやすい。子どもが音楽室に来た時には曲をかけておいて歌いながら座る。最初に座らせて、静かにしておくことが、先ず難しい。部屋が変わると移動している間に気持ちが変わるので、来たら、何か始まっているんだというように、リコーダーの曲をかけてリコーダーを吹かせて、静かになったところで始める。
- 3年生はリコーダーを吹きたくてたまらないのであるさい。リコーダーをしまわない限り待つ。ここが大事なところ。あれば絶対触るので、必要なものだけ机の上に出す。規律が大事。ルールを守りましょうという事を良く言うておく。初めて音楽の授業をする時はルールを決めて、徹底できるまでは叱ってもみんなに迷惑がかかるという事を言う。発達障害の子どももいるので、視覚にうたえるためプログラムを書いておいて、できたら消していく。カードをつくっておくとよい。
- 発達障害の子は音が鳴ったら頭が痛いと言ったり隠れたり。1人か2人なのだがそういう子がいると、それに振り回される。周りの子も相乗効果でなってしまうという特徴があるため気づかっている。
- 自分のやりたい事もあるが行事があるので行事に合わせて授業を進める。
- どここの学校でもあるのですが、秋、2学期の中心部分が学習発表会とか演奏会っていう学校行事に関わる表現活動がかなりウェイトを占める部分があります。時間数が高学年になると少なくなってきました。だから、そこをどういうふうに持ってきて、1学期に何をさせたいかとかどんなことを表現させたいかを思いつつ1学期にどんな基礎、ベースを作っ

ておくというようなことをまずは意識しつつ授業を1年間スタートさせるということが多いです。音楽専科をしている時と、普通の担任をしている時だったら、授業の意識が、実は担任をしているときには音楽に対するウェイトがすごく少ない。ほんとに瞬間くらいしか考えられない。夏休みだったら夏休みのうちに考えるとかあるけど、4月スタートっていうのは、まず新しい新採用さんは、もう何もわからないうちに音楽をするので、何が何か分からない。それから頼れる人も多分、自分が担任で授業をするのだったら、小さい学校だったら、音楽が出来る人とか相談できる人がすごく少ない。うちの学校なんかは恵まれている方だとは思いますが、すごくなくて。自分だけしか、まず最初に自分だけの枠の中で考えていかなければいけないということがすごく厳しいところです。

- パターンとしては、最初知っている曲を歌いながらここ今日ちょっと気を付けてもらいたいなというところを軽く練習したり、すごくちゃんと出来なくても今日オッケーぐらいで、今日のメイン、教科書教材を中心にしているのですがその中で自分で拾って、大切としてここは教えておきたいというようなことを中心に、何時間か考えて計画を組んではいるので、歌唱教材であるとか、楽器・器楽であるとかその日によっては違うんですけども、その部分でどういうふうに、歌唱ならどういうふうに、今日こんなに弾んだ曲なら弾んだ曲のように私も弾みます。
- パターン化をしてやって、見えるようにパネルを張るとか、何をすればいいとか、何分間練習すればいいとか、一人だけでは練習しないでグループで練習するとか、互いに聞きあうとか、そのパターンの中で毎回同じことではなくて、ちょっと変化させながら練習させて、楽しむとかというようなことをしていこうかなと。また2学期になったら全然違う、(音楽発表会があるので)急に怖い人になるんですけど。やっぱり音を集中して絞っていかないといけない、緊張感、緊迫した音楽になっていくんですけど。

- 楽しいだけじゃなくって、少し高いハードル、ここを越えたら人が感動、自分たちももちろん感動するんだけど、聞いている人が感動してくれるっていう達成感みたいなのを、経験させてやりたいと思います。
- 音楽は、ほとんど耳で覚える。だから、ドレミだったらドレミとか、やっぱり良い音をたくさん聞かなければ子どもは伸びないです。だからなるべくきれいな音とかきれいな声を聞かせてやりたいし、「出来たら真似してごらん」みたいに。理屈はあんまり言っていないです。頭声発声とか、そういう技術的な、テクニカルなことは言っていないけど、良い音を聞いて、その音を真似してみようということかな。楽器の音にしても、声にしても。
- 低学年は教科書だけでは1年間もたない。3年生から上になるとあふれるくらいだから、選択していかないといけないし、リコーダーもきちんと教えていかないといけないし。もうちょっと面白い曲の方がいいとか、もうちょっと工夫した曲の方がいいなって思って選ぶのですが、1・2年は、やっぱりもたないので。楽しいいろんな曲を知って。それは基礎基本をきっちり教えないといけないのだけど、教科書だけではやっぱり物足りない。それだけではないものを色々取り入れてやっています。自分が聞いてこれいいなと思ったものとか。色々蓄えていかないと。
- 音楽の専門的な事よりは学級づくりをベースとした音楽の授業を今年1年考えていきたいと思っています。
- 学習規律が大事で、先生が弾けない事とかは大きな問題ではない。ざわざわするし。ガチッとさせると心がしぼんで意欲がなくなると歌も小さくなるし、解放したいのだが、解放しすぎると音楽なのか何の時間なのか分からなくなる。今何をするか、細かいステップをつくって、今日は歌の時間にしようとか、リズムを覚える時間にしようとか自分の中で1時間の目当てさえはっきりしていれば。音楽の最初の時間にこの時間はこのようにすると決めておいて

やる。

- 学級開きの時歌詞に力のある歌、気持ちがよっていく歌を選ぶ。学級経営に役に立つと思う。一緒に声を合わせたというだけでもやった感がある。気持ちが合わさって。気持ちいいなって言いながら。歌詞を変えて学級目標を入れるとか。それは担任の強み。
- 共通教材だけは歌詞について、出ている共通教材をすべてやるのは難しいと思うが、最低1曲だけでも取り上げている。後は鑑賞になる。担任を持っている時は家に持ち帰らせて、家で話題にするように言う。語り継いで、歌い継いでほしいと言う願がある。子どもができた時とか生活の中に入れてもらいたいというのを頭の中に置いている。今の光景と結びつかないが、家で話をするとおばあちゃんは曲を知っていたと子どもが言っていた。
- 教科書はおもしろくない。面白くないと思ってしまっただけで指導するので、授業はそれは面白くない。だから教材の値打ちというのが子どもに面白くは伝わらないでしょ。「あっ、これがいい」と思ったら、教科書全部は絶対扱えないので、今はセレクト出来て、「あっ、この教材はこういうことすればいいな」って。1回見たらもう今は解るのですが、最初はそれが解らないので、歌ってみて面白くないな、子どもものらないなと思っても、出したものはどうでもいって感じて良くわからない時間が続くという。だから、教材を選択して、どういう値打ちを持って授業するかっていうことを意識して、「ああ、これでこれが教えられるな」とか、「これはここが楽しいから伝えたいな」っていう思いを指導者が持っていないと、「ただ歌ってみました」っていうような時間になる。
- 専科は専科なりに、その学校のカリキュラムとか教育課程を把握して自分がどういうふうに動いていっていかってこのことを考えながら、学校全体の音楽を作っていくところをやったり考えていかなければいけないということで、これも年々やりながら蓄積したものを少しずつアレンジしていけるということが

できるので、音楽専科になっていけばそういうことが出来ると思いますけど。はっきり言って音楽の人は孤独。相談が出来ないっていうのは、まあ学校の中ではね。だからもう早くからいろんなところ、外へ出て行って、音楽をしている人を捕まえて話を聞くとか、年に何回でも講習会に行き授業研究をしないと、音楽を授業研究してくれる人は誰一人も学校にはいないので。学びあいの授業とかもやっぱり音楽でもそうやって関わるとかグループで関わっていくところもあるので、そういうことを、学校全体の中の音楽で。子どもを育てていくというようなこと。音楽という部分と育てるといふ部分、人間を育てるといふ部分も加味しながら授業をしていかないといけないというのは、最近では思いながら、ちょっとはゆとりが出来思うようにはなっています。

## ②歌、発声について

- 1年生ってすごく元気に歌うので「ウワー」ってなったときには特にそんな技術的な指導はしないけど、「きれいな声で歌ってね」というと子どもたちは自分たちで気を付けて調整するというか、そのくらいしか出来ていない。
- 小さい時から本当は訓練が必要でしょうけど、どなったりしたらいけないけど、楽しく、心から楽しみながら歌ってというのが中心になります。
- 1番は姿勢を大事にするということは言っています。声の質に関してはそこまで至っていないというか、そんなワイワイ、ちっちゃい声だから大きい声の方がいいっていう感じなので、ガミガミした声に対する指導っていうのはあまりしていない。
- なかなか大学の時教えてもらった通りにはいけません。外部の先生に来ていただいているので、その先生の立ち方とか声の出し方とか、視線の定め方とか、そういうことはすごく役に立っています。専科がないので2部合唱をするまでの時間が取れない。
- 模範の歌唱ができれば良いのですができない。声が出ない。

- 音のイメージはさせていますね。だからここから出してとか、イメージできるような動作をしています。「声はここへ落とすのではなくて遠くのほうに飛ばすんだよ」とかなんとか。手を使い、体を使い。
  - どなり声ときれいな声の違いは意識させれば瞬間に直ります。クラスが落ち着いていないと、クラスのメンバーを信用していないと歌声を出さないので。そこら辺はやっぱり担任との連携が必要。
  - 口を開けようともしませんものね。こじ開けようともね。ほんとに。人を信用していなかったら絶対に歌を歌わない。
  - この小学校の子はハモルことがいいと思っている。ハモれないとかこ悪いと思っているので、一生懸命歌う。先輩たちが歌声を響かせているという素地があるので、そこは楽です。2部合唱だったら何の抵抗もない。小学校は3部まではめったにしないのですが、2部合唱なんか当たり前と思っている。
  - 外部講師の先生の指導のあとは「おお〜」っていう声になってすぐまた元にもどる。どっちも好きなのですが、外部講師の先生に教えてもらってきれいに歌っているのもいいし、自由にのびのびと少々はずれても元気に歌うのも良かったり。ほんとに教えないといけないのだろうなとちょっとは思うのです。
  - 自分自身も歌う姿勢とかそういうのを知らなくていろんな本を読んだり、前の学校で音楽の専科が立ち方、声の出し方をどうやって言われていたかなと思いだしながら子どもたちに言っています。
  - 基本的な発声の部分とかは全然知らないで、何か載っている本ないかなとか、自分が小学校の時に歌っていたのはどんな音階だったかなと手探りで音階を弾きながらやっています。
  - 歌唱表現で無理はさせてはならないが、2部にしても4、5部になる。ピアノの周りに集めてみんなの顔を見ながら、音を取る。一人ひとりの声が分かるのでそれを大事に合唱をつくっていくメリットはあるが、曲にもよる。少人数なので目に見える形で良い。
- ③伴奏について（ピアノ・オルガン・キーボード）
- 音楽の専門を出た方はできるが、私たちは専門ではないので弾きながら歌うのが高等な技術で自分が弾いていたら子どもは歌っていないし指導もしたいし、それができないのでCDに頼る。音が取れない時、最初だけは単音で弾いて。CDの方が歌を良く覚えるので。おかしい所を弾いて教える。
  - まれにこの曲をやりたいと思っても、練習する時間がない。すぐ弾ける人であればいいのだが。
  - ピアノはコードで充分。楽器にこだわらなくてもよい。ギターが上手な人はギターでも良い。オカリナでも良いのでは。
  - 実際ピアノを弾く場面って、ほんとに私は苦手なので、あんまり弾き歌いをしたり自分が伴奏を付けてあげて歌わせるっていうよりはCDを利用する事が多いです。
  - ほとんど子どもと同じレベルで、子どもが鍵盤ハーモニカをする見本的なことぐらいしか出来ないの、じゃあ歌を私の伴奏でっていうところは、よっぽどのやつじゃないと出来ないと思う。
  - 弾けたら弾くのだと思うのですが、子どもの状態に合せられるので、ある程度のことは弾けた方がいいなどは思いますね。
  - 昔だからコードなんてもちろん勉強していないし弾き歌いもなかった。少しピアノを習っていたので自分で勝手に選んだ曲を練習していた。だから未だにコードがわからないから適当に弾いている。
  - 聞かせるときもそうですし歌わせる時も基本的にはCDに頼っています。基本的に自分が弾くってことはないです。
  - 授業の流れがすごく組み立てずらいというか、CDをかける待ち時間があったりとか、「先生もっと明るいような歌声で、伴奏がいい」と、子どもたちの方からそういう注文があったり。ピアノが弾けたらテンポを早く出来たり遅く出来たり、全体の流れを上手く流せるだろうなと思っていつもどうしたらいいのかなという気持ちでいます。
  - それはここもうちょっととか、もう少し聞いてと

か、CDではできないので、弾けたらもうちょっとゆっくりとか、もう少しここはもう1回とかいうときに思いますよね。高学年になればなるほどそれが必要なんだけど、高学年の曲を練習するのが大変なんです。

- あんまりピアノが得意じゃないので、適当弾きますし、CDも上手く使う。伴奏がのっていたら、全然曲想が違って感じ取って気持ちがいいので、それを聞かせてやったりするのもすごくいいと思うので。
- 本当に練習する時間がないんですよ。だから簡易伴奏でとか、旋律を中心に適当に和音を合わせるとか、これではのれないなと思ったらCDをもって来るし、丁度専科の先生もおられた時にはさっとお願いをするというように。
- CD一辺倒だと子どもはのりきれなかったり、音取りができない。正しい音とか音高とかは身に付けさせたいので、ピアノで音を取らせながら音を合わせたりということはします。
- ごく簡単なのは練習したりもしました。教室で音楽を教えるのは初めてなので…。隣のクラスの歌もよく聞こえて、私も迷惑かけるぐらい上手に弾きたいけどそれは出来ず、CDをかけて。
- 教えてもらったりしたのを弾いたりとか、発声のところだけは弾きます。一緒に歌ったり遊んだりする方に馴れてしまっているのだと思います。弾きながら歌いながら教えるのは無理かもしれない。練習が必要。経験がないと思う。3年生以上でリコーダーとかゆっくり伴奏してあげたいときは簡単な伴奏を弾いたりすることはあったが、吹けるようになったらCDと合わせてみようというので結局CDが主だなと思います。
- 弾けたら楽しいだろうと思います。伴奏していた時もあったんだからと思うときもあるけど、堪能ではないし、練習しないと出来ないなので、初見で弾いてみたいと思いますね。
- 教科書にのっている歌だったら簡単な伴奏で、和音とメロディーとかでできるけど、教科書以外の歌

だったらとてもできない。

- 弾き歌いをやっても、楽譜があっけないようなもの、子どもの顔を見て歌わないとついでこない。授業の流れが悪かったら騒ぐ。小学校は柔軟な対応をしないとだめなので、簡単な伴奏で良いので、下手でも良いので一緒に歌う。CDは上手に活用する。
- ④器楽について（鍵盤ハーモニカ、リコーダーなど）
- 教員の中でも、タンバリンの正しい持ち方とか叩き方とかわからない人はいっぱいいると思いますよ。打楽器類の叩き方とか。
  - リコーダー入門のところをインターネットで調べて、プリントアウトしたのをバーッとみて、それを全てすると何十時間もかかってしまうので、大事なところをピックアップして順番に教えているところですよ。
  - 困りました、実際教えてみて。タンギングの仕方とかも、結局は先輩の先生に、「今日初めて教えるんですけど」っていったら、「上だけ取って、トゥッ・トゥッ・トゥッ・トゥッってやるのよ」とか、「最初は手が逆になる子も多いから、先生が反対に持って鏡になるように見せるのよ」というのは教えていただきました。大学の時確かに吹くのは吹いたと思うのですが。
  - リコーダーは奏法っていうのを知っている人が指導するのと、知らない人が指導するのでは違うと思うので、その部分は、きちんと勉強して、初期段階でどう教えたら良いかっていうのを。
  - 差があります。弾けないのを前提に、ひらがなと一緒に始めて勉強するんだということを前提にそこに合せて授業はしなきゃいけないと思うのですが、そうすると鍵盤ハーモニカは私自身が何年振りだろうという感じで、一から教えるというのもまずどうやって見せようかということから始まり、黒板に書いてもわからないなと思いながら指からもう一回行っては戻りみたいなのをやって、一人ひとり見る間もなかったので出来てない子も何人かはいると思うんです。支援の先生も決まった子は行ってくださ

いますけど、思わぬところで指の使い方が違う子がいたりして、それを見ていたら1時間全部それに使っているわけじゃないのであつという間に終わってしまうという感じで。弾ける子たちが待つ時間があるし、それからやりがいは薄くなってしまふというのがあります。

- 9人なので小人数での器楽指導が課題である。音量の前に一人ひとりの個人差の幅があつてリズム楽器、鍵盤楽器ができる子、できない子の9人9通りの困り感。それをどのようにサウンドに仕上げていくか、気持ち良い音に作り上げていくか。
- 楽器の持ち方など現場に出てから知つた。タンバリンの持ち方を知らなかつた。すべて現場で教えてもらふ。

#### ⑤鑑賞について

- なかなか難しいところで、鑑賞つてというのが上手に出来なくて。聞いて感想を書かせたりはするのですが、なかなかそれも出来ない。本なら楽器があつて、「この音はね」とか、それが出来ない。子どもたちも良く知つている曲は、「知つている」、「聞いたことある」つて言うんですけど、知らない曲は、「何これ？」みたいなのも…なかなかその鑑賞の授業の組み立てつてついうのも、難しいなとは思つています。
- こんな簡単で鑑賞の授業をしたらいいよつてついうカリキュラムとかがあれば、モデル的なもの、授業の流れとかがあれば、初心者でも何とかそれにのつていけるのではと思ついます。
- よく出ている本を買つて、こんなことをしてみつてついう事例がありますよね。それもやつてみたりしたんですけど、なかなか難しいですね。発展させていくのが難しい。一問一答くらいなら結構いいのですが。
- 基本は教科書に從つて、指導書を見てこんな風にしていくのが望ましいのだろうけど、私はこうかなつという多少アレンジを加えつてつ。鑑賞も評価をしないといけなつたので、去年は評価のためのワークシート

的なものになつてつたかなと反省点でもありますが。

- 本当に教師の方がのつている、楽しさ、曲を聞いている時も子どもたちもCDを聞いてつたら楽しいなつという感じが、ふ〜ん、ふ〜ん、ふ〜ん…と伝わつてつたら、こつちがムスつとした顔をしてつたらいけないので、お互いに、「どうだつた今日の曲？」つて聞いたら「弾んでつて楽しかつた」とか、「明るい曲でなんとかだつたわね」とついうように言語化させて表現させたり、「じゃあどんな歌い方したらいい？」とか、「どうついう声出そうかな？」とか言つたり、話しながら進めて歌つて表現してつていくとか、落ち込んでつて頭が下を向つてつたら、視線を直させることをしたりとかをしながら。
- 鑑賞の授業をどうつるか。書くことので得意な子、書いて表現できる子できない子がいる。体験しながらやり方を工夫している。

#### ⑥音楽の授業で困つていること

- 音楽の授業は高学年になるに從つて、好きな子嫌いな子が別れる。聞くのは好きだが歌うのは嫌とかできた時困る。歌わない子に出会つた時どうやつて歌わせればよいか。無理強いは良くない。
- リコーダーの二重奏を教える時、ドレミが読めなくて書かせるのに時間がかかるのでドレミを書いた楽譜を渡すのだが、そうなるとドレミが分からないつという悪循環。
- 高学年の専科の先生がいなくて、音楽が得意ではないが仕方がないので専科をした。
- 行事が多いし、時間数も少ないので音楽の授業がおろそかになつてしまつているついうところが、学校現場ではあります。
- 歌唱指導つてついうのは授業の中でなかなか専門的にできなくて、困つている。
- 評価も私はいまいち仕方が分からず、どうついう歌い方がいんだらつうつてついうのがわからなかつたりする。
- 音楽は教材研究に時間がかかる。ピアノが弾ける方



にとっては何でもない事も、やっぱり準備をしようと思うと他の授業よりは時間をかけて準備が必要です。

- 音楽専科をしていると、音楽の事ばかりを考えていますから、あれもしたいこれもしたいと思えますが、その週に2時間ほどの勝負の時間が上手くいくか。失敗すると、次の音楽の時間まで取り返しがつかないので。担任をしていると失敗しても次の国語の時間に修復する時間があったりと日々修復可能ですが、そこが難しいところです。
- 教科書の曲はCDがあるので教科書を中心にしているが、CDがない曲をさせる時に困っている。
- 学校によっては歌っていない学級もあるんですよ。そうすると盛り上がらない。担任の先生の価値観でそんな朝から歌わなくてもいいって授業だけやると、全校音楽になっていかない。学校全体の取り組みとして決まっても担任の先生の判断でしんですね。ウエイトの置き方が違う。楽譜を配っていても楽譜を持っていかないとか。CDを配っていても机の上にはずっとあるとか。怒ってみたところで仕方がないので。そのクラスは音楽の時間に歌わない。そうやってきたら、担任がそういう価値観を持っていなかったら、音楽の時間に「はい、歌おうね」っていても価値観がないんですよ。そんななおざりな音楽じゃないって言われて。でもこの学校は良い伝統が息づいている。専科の先生の声の指導。声が通るのは迫力がある。良いモデルがおられるので、ああ、こう歌えばいいんだっていうのをふっとわかるようにお話してくださるし、モデルを示してくださる。
- 発達障害の子を専科の先生ともっている。困るのは器楽。鍵盤ハーモニカ、リコーダーをする時、押さえ方一つにしてもみんなと納得のいくまでに時間がかかるので、時間の確保が困っている。別室で音楽以外の時間で習熟、練習を重ねるが、音楽の時間にできそうなこととできなさそうな事を瞬時に見極めるのが一つの仕事だと思っている。楽しくやってほしい。嫌いになってほしくないで、無理強いし

ないで。歌はとても好きでよく歌っている。

- 音楽の特性上、目に見える形として残らない、音楽が好きでも音楽の授業となると、とても解放的になって、図工は作品が残るのでやらざる負えないところがあるが音楽は授業に参加した人、しなかった人、形として何も残らないので、それをどういうように持っていけば授業が成立するか困る。何か形に残れば良いのに。だから、記録を書かせようとか、感想を書かせようとか。
- 教科書のメニューをどこまで、どれだけ達成させるか、学年によって、その年によってまちまちの事があるので、内容を理解しているか。上からは、合唱を楽しませてくれ、音楽は楽しませてくれという要求をされてきた。専門的な事は良いのでと。
- 私は音楽で何か表現したいのだが、それ以前の問題、机の上の物を触らないとかそういう規律がないので難しかった。ルール作りをして流れを作って段取り良くしておかないと、歌って終わった、リコーダーを吹いて終わったとか、ただやっただけになる。
- 音楽専科だと難しいが、国語で音読があるが、リコーダー等の読みもカードと一緒に綴じて6年生でやっているが、担任だと励まし、認めたりできるが、専任だとそれが機能しないので、時間の確保が難しい。学習発表会の時は休み時間も練習をしている。時間のやりくり、子どものやる気がリンクしないといけないので。
- 小学校の音楽は総合的なものだと思う。国語も算数も入っている。歌詞の意味、リズムの取り方、人間性が出てくるし経験とか大事。こういう事を思っている教職員は少ない。音楽の時間を削ったり、軽んでいる。男の先生は丸投げだし。この事を持っているのと持っていないのでは、音楽の授業の芯が違ってくる。できるか出来ないかではなくて。専門的にやろうと思ったらしんどくなる。学級の中で音楽に理解ある先生とそうでない先生は全然違う。発表会の練習する時も協力がなくてできない。
- 1年生は保育園の歌い方を引きずってくる。元気が良いだけで。1年生になったら切り替えがほしい。

そのままいく先生もいるので、3年になってから切り替えるのが大変である。

⑦新採用で初めて音楽の授業を持った時について

- ・教員1年目で、音楽は全く経験がないので、ほんとに何をしたらいいのかという感じからやっています。
- ・今年初めて音楽をして、弾くとかしないで常にCDでやってしまっているんですけど、もう困る。今まで見てきた、例えば専科の先生の授業を去年ずっと見させていただいていたので、思い出しながら、こういう流れ、例えば歌を歌って楽器を演奏する流れだとか、歌唱法も専科の先生が最初にされているように。でもやっぱり鍵盤ハーモニカを最初に使う時だとか、どうしようかなという感じで、首に巻く時どうやってだったかなとか、これ弾けているのかな子どもたちはとか、評価も分からないです。今月の歌を歌うにしても、長い曲だとかどうやって上手に歌わすとか、どこの歌詞とか、専科の先生はこの歌詞をピックアップさせてとか、ここはこのようにやられているけど、読めなかったりして、私はここをどうすればよいかなど。そうするとあれよあれよという間に過ぎてしまっていて、反省をしています。
- ・音楽が苦手であったので、最初の頃はびくびくしながらやっていた。
- ・低学年の担任だったがいきなり、5・6年の音楽をしなさいと言われた。ピアノは弾けない、わけがわからない。子どもは遊びの時間だと思って来ているので困った。新採の頃は右往左往で全く駄目であった。困ったままで1年間が過ぎてしまった。慣れてきたら、いろいろ聞いて、パターンを決めて、CDは子どもが来る前からかけておく。簡単な曲から入り指示をだしていく。最初は悲惨であった。他の教科だと教科書にそっていけばよいのだが。
- ・どんなにピアノが弾けても、新採、講師で来たら最初はみんな困っていた。だから授業の途中で職員室に帰ってきたりしていた。授業の最初が大事。
- ・初任の次の年専任でした。でも大変でした。幸い子

どもがピアノバリバリの子ばかりだったので、伴奏は全て子どもがしたり、例えば音楽発表会もあったのですが、1クラス3曲ずつ発表しないといけなくて、でも子どもがとても上手だったからみんなバリバリ伴奏して、指揮は自分も自信がないから、ずっと子どもがしていたって言っていたので子どもにしてもらっていたけど、次の学校でもう1回専科になった時には「先生がしないといけない」と言われたのでしました。大学で指揮法なんてないですよ。最初に専科した時もあちこち見せてもらいました。いろんな学校で研究授業という研究授業は全部見に行かせてもらって、勉強させてもらいました。見る勉強が大事だと思います。自分だけじゃわからないですから。

- ・わからないままやっていたけど、他の授業を見に行きたいなと思ってこっちの授業もあるので、見にいけなかったのが、わからないままやりました。ちょっと空いている先生に聞いたり、その程度でやっていました。「だいたいこんな感じでやったらいいよ」くらいは聞いていた。大学時代にはなんとなくは聞いていたのかもしれないですが、この日の授業はこんな感じということくらいしか。1時間の流れってというのがどうのっていう授業はなかった。部分的なこれはこういうふうにとかだったので。
- ・困りました。本当の思いは何とか音楽の時間を避けたいぐらいでした。だけど時間を確保しなくてはいけないし、でもするならば子どもたちに1年間過ごしただけのものは残さないといけないという思いもあるので、指導書を頼りに過ごすしかないし、それから周りの方々に聞きました。「これをされた時はどうされたのですか？」とか、「どうしたらいいのでしょうかね？」ということは聞いて何とか過ごしました。CDという発想がなかったから、だから死ぬほど練習して、子どもは歌ってくれているんだけど、自分の手元に必死で子どもを見ていられない。
- ・最初規模が小さいところだったので、音楽をやらなきゃいけない、高学年とか、ほんとに特訓、朝練・

昼練・夜練して、次音楽あるなとか思って大変でした。

- ・小学校で音楽をきちっとされる先生に教えてもらっていないから、何も教わっていないのです。だからあの時に習った音楽のやり方というか、昔習った音楽のやり方しかベースにないので、もうなんかたぶんむちゃくちゃをしていたと思う。
- ・音楽をそこそこ習った身としても、1年目はもうロボロボとした、正直。

#### ⑧教員養成大学時代音楽関係の授業で学んだこと

- ・弾き歌いがありました。この曲に伴奏を付けなさいっていう。メロディーとコードが書いてあって、それに自分で。出来ない人は簡単なやり方で。
- ・教員養成時代のことはあんまり覚えていないのですが、何が役立ったかということよりも、教えてほしかったということの方が多いので。
- ・技術的なことより弾き歌いとかコードの勉強とか、自分で簡単な伴奏が付けられるようにというのが重視だった。
- ・大学時代、発声、合唱などあったがそれが即できない。採用されて3年生を持ったが、教科書を見て、やることを決めて。行事に音楽の授業は取られるので。実践の場とすぐには結び付かない。
- ・学生の頃ってなんとなく聞いているのかもしれないんですけどやっぱりまだ実際に自分がするという危機感がないので、イメージがですね、それが現場とは結び付かない、イメージがわからないので、なかなかという部分もある。ましてや自分が得意でないと、教育実習で音楽をするわけでもないし、やっぱり自分の得意な国語とか算数だとかいうところで授業するので、実践するっていうのもあんまり学生の時に子ども相手にというのもなかったもので、現場に行ってからっていうことの方が。苦手なりに何とか。クラスが複数あればなおさら他のクラスの得意な先生との差があまり出来ないようにしなければならんっていう思いは強いので、なんとか似たようなことはして、経験だけはして次の学年にいかない

と、あのクラスの子たちだけ全然していなかったらしいっていうことがないようにという思いはありますけど。

- ・鑑賞が2時間ありました。曲を聞かされて、合わせて動いてみようとか、イラストを描いてみようとか、音楽から感じるものは、とかその理論を習ったりはしたのですが、理論はあまり残っていないのですが、やった事は残っています。
- ・音楽の本質、楽典等の理論で実技はなかった。

#### ⑨⑧で役に立ったこと

- ・伴奏づけ、弾き歌い。

#### ⑩⑧で教えてもらいたかったこと

- ・弾き歌いをやっても、即、実践に結びつく事はなかった。実際45分何をどのようにやればよいか。この時間に何をねらって、何を評価としては習わない。模擬授業は少しやった。実践で役に立つことを習いたかった。図工の時間も何やって良いかわからなかった。他の教科と違って流れに沿ってではないので。
- ・大学の時、不真面目だったのかもしれないのですが、音楽の授業の基本的な流し方というか、授業の流れというところからまずそういう基本を教えていただけたら、応用にも目がいったのかなと思って。今はとにかく先輩に聞いて、「ああ、こうなんだな」と、それをただ必死にやっているっていう感じなので、大学の授業でそういったのがあったら良かったなと思う。
- ・学生の時に習いたかったなっていうのはやっぱり模擬授業をすごく。いろんなパターンをね。合唱とかアンサンブルとか、あと鑑賞もまたこれ難しい。こういう曲を使えるとか、種類とかバリエーションが欲しいなと思うことがあります。
- ・音楽の苦手な者からすると、ある程度教科書にあるものしかわからないという部分もあったりするので、大学の時にいろいろな、こういう音楽を使ってこういう遊びが出来るよっていうようなこと、いろ

いろいろな種類を知っていて、それを持って教員になっていたなら、ピアノとかは苦手なんだけど、CDとか活用しながらでも、下の学年の子の音楽は何とか出来るのかな、男性でもと思います。

- 弾けるのが理想でしょうが、実際に伴奏しなくてもこのように音楽ができるっていう事を教えてもらいたかった。
- 小学校で実際は鍵盤ハーモニカとかリコーダーとかを授業の中でするけど、学生の時にもやってほしかった。
- 大学の時に、どうやったらいい声が出るか、子どもたちが「ああ、いい声出せた」と思うような声が出せるかという適切な指導の仕方とか、タンバリンを持つにしても、本当に私のやっているこの持ち方でいいの？と思うときがあります。トライアングルを持ってするときにも、私はずっと上を持つのかと思っていたら去年そこじゃないって気がついて、「あっ、ここじゃなかった」と思ったり。手で持ったりもするんですよね。知らなくてびっくりした。そういう基本的な楽器の一番きれいな音の出し方、丁寧な扱い方を教えていただきたかった。どうすればいい音が出るのかとか、そういうのを知っておけば今自信を持って子どもたちに声かけができるのに。「たぶん」っていうのが常に先に頭の中にあるのです。「たぶんこれがいいと思うよ。たぶん…」って。
- 授業でただ合奏をするだけではなく楽器の持ち方、扱い方を教えてもらいたかった。
- 楽器の、鍵盤ハーモニカでもリコーダーでも基礎的な指導を子どもたちにするにはどのようにしたらよいか。
- 音楽部会に入っていて良く出てくるのが、リコーダーを吹けるようにするにはどうしたらよいか、歌唱指導はどのようにしたらよいか。テーマを絞って実践に結びつく事、その技能をどうやって伸ばしていくか、曲の選定、こんな曲は取り組みやすいとか、入門期はこんなのがいいよとか、教科書には8小節ぐらいしか書いていないので。

- 大学の音楽の時間といえばピアノレッスン、弾き歌いが主だったような気がする。節作りの時間とか入れてほしかった。低学年の担任を持つと即できるので。新しい先生は、節作りって何なのという感じである。今、節作りがたくさん入っている。
- 即、戦力的な技能を付けるのも勿論だが、音楽は音楽としての魅力を充分教えてあげる事も大事。20年教師をしているが音楽の研究部会に入るとかしないとそういう事を学ぶ機会がない。教科書を読むだけになる。音楽家の方が音楽の情熱を語ってくださる事も必要では。

#### ⑩初任、若い教師へのアドバイス

- 初任者の時、音楽の堪能な先生から、ピアノで音を取るようにと指導を受けた。上手下手に関わらず、子どもの音感はCDでは育ちにくいと。大きい学年の楽譜は伴奏譜も難しいので音楽専科が高学年にかされやすいが入門期の1年生は弾けた方がいいと思う。
- 現場は厳しい。実習は幻想である。先生がいて…それでできたと思っている。先ず気力。体力そして知力。しかし、専門性があっていいと思う。
- 1時間の流れを考えますよね。教育実習ではそういうことは習いましたが、模擬授業なんて私の頃には全然なくて、教育実習で習ったから、その通りに最初の頃はしますけど、子どもはのってきませんでした。
- 学習規律と授業の専門性と両方ある中で、学習規律は学級経営が初めての先生は上手くやれと言っても難しい。学習規律を勉強する時間と音楽の専門的な事を勉強する時間と両方あれば良いと思う。
- 困った時に聞ける人がいないとだめ。泣きながらも良いので、同僚に。聞けなかった人がいて、ノイローゼになった。それほど事でもないように見受けられるが、自分で抱えてしまわないように。
- 学校の先生は子どもが相手、親もいるし、人間関係が上手くないかないと。いくら知識があってもスペシャリティーでも困る。それだけではやっていけない。

コミュニケーション能力がないと。

- 親、子ども、先生たちとも繋がりががあるので。繋がれる人でなければ難しい。昔のように若い先生だからというように甘くない。以前は若い先生には若いというだけで子どもがなついていたが、今の子はエスカレートしていき学級崩壊してしまう。若い先生だからといって、好かれたりはしない。子どもが、新人がちゃんとしないとを言うのを聞く。高学年の子で口の達者な子は言う。家でもそんな会話をするのでしょう。昔は若い先生はスターだった。今は年配の先生の方が安心感がある。実力がないとだめ。だから新人の先生はしっかりしていないとだめ。
- 昔は若いというだけで教えてもらいながら何とかなつた。今は教員も管理されて競争させるような状態になっている。だから、自分の持っているデータをあげないという先生もいる。ABC-Gとランク付けがある。そういうシステムがあるのに、若い子がよく学校の先生になってくれると思う。ありがたい事だ。若い人はそんな事を知らないから。だからよほどの強い精神力を持っていないと。最初の3年は大変なのが普通と思って覚悟していれば良い。その先は良い事もたくさんある。子どもが慕ってくれたり親からの信頼を受けたり。それまで辛抱してもらいたい。
- 一個の良い事に百個の辛い思いをしている。打たれ強くなる。今の若い子は打たれていないので、弱い。何の仕事に就いても精神力。
- 最低打楽器を経験する。木琴や鉄琴を経験する。私も経験を全くしないでやってきたので。後で恥ずかしくても聞く。楽器屋さんが来たらどうやってするか聞くというようなことなので。いろんな楽器経験をしたり、一緒にアンサンブルするような経験をしたりして、楽しいなっていう感覚を持たせてやらないと、「また今日も音楽か」っていうように思って子どもたちに指導しても、子どもは面白くない。それから上手いかなかったら怒りたくなる。腹が立つから。自分が上手いかないので、怒りたくなるんですよ子どもを。だから怒ってばかりの授業。

怒ってばかりの音楽。うまく動きやしませんし。

- ただ大抵の場合、何にも出来ませんという人は例えば理科と交換とか、音楽をずっとしないできている人も、もちろんいますけどね。でも、それが転勤したりして、どんな学校に行くかわからないし、他にする人いないからあなた音楽しなさいと言われた時には、出来ませんじゃすまないですよ。
- 伴奏ができないのなら、子どもに響く一生懸命な姿を見せた方が良いと思う。子どもに、誰か弾いてもらえないかなと頼れば子どもは喜ぶし、歌う気になる。自分ができるに越したことはないが、担任の役割とか、自分が持っているものを子どもたちと一緒に作れば良い。専門ではないのだから。

⑫音楽の授業を上級の学年にどのようにつないでいるか

- 教科書のリズムとか落とさないようにやっておくと次につながるのではと思って。共通教材はやる。節作りとか1年生から入っているので、そういうのはきちんとおさえて。何回かやらないとできないので。
- 記号などは週1時間では覚えにくい。廊下に貼って、めくったら分かるようにして、工夫して。ゲーム感覚にして。作曲家の写真を貼って名前を隠してめくれば分かるようにしている。プリントを書いたり。鑑賞をした時、プリントの下に書いて繰り返しさせる。国語でも書写すると良いので、同じように音符を書かせる。
- ドレミファソラシドは何回も書く練習をさせる。書かないとだめ。音楽と数学は共通している。体育の得意な子はリズム感が良い。次の学年に上げる時、困らないようにやっている。せめてト音記号のドレミぐらいは読めないと。高いドと低いドが分からない。昔は何回もしたわけではないが、わかった。
- 専科の先生は結構交代があったりして、1年ごとに代わられて講師の先生が専科されることもあるので、その先生によって、リコーダーがどのくらいまで出来ているとか、ふたを開けてみて「ああ」っていうような。来られたばかりの専科の先生が大変だったり、とても助かったりとか。系統性みたいな

のがない。

- 教科書に出ている程度が、ある程度みんなが出来るようになって、次の学年にという目安しかないですね。その学校としてとか、全体で教科の音楽ってというのは特に出来ていないです。
- みんなでまとまってやっていけばこんな素敵な音が作れるという達成感や経験を1年生の時から積み重ねてきていけば、いけるんです。
- 合唱とか合奏なんかも仕上がっていくんだけど、ただその1カ月間だけじゃなくて以前の経験、やり遂げたみたいなの、小さい経験、達成感があつたらそこはやっていける。低学年の時にあまり細かい事を言わずに音楽を楽しんで、歌ったり踊ったりの中で、それでリズム感を付けたり、そういうことが、やったら面白かったね、みたいなのをしてあると。
- 低学年ではじめがちゃんと付けられるように。ガサガサなるんですよ、教室ですると。はじめをきちっと。道具をどう持たせるかとか、ほんとに緻密に考えておかないといけないんですよ。鍵盤ハーモニカはいつ出させるかとか。いつしまわせるかとか。吹かないときのホースをどうしておくかとかね。そうやっぱりスタートのところ。吹かない時、ホースはこの窓に入れておきましょうとか。そうしないといつでもこうなったりこうなったり（身ぶり手ぶりで説明）しますからね。なんかそういうスタートのところのルールとマナー。もう1回言うのは大変なので。今まで言われていない事を言われたら。基本的なところが出来ているとずいぶんやりやすい。楽器を大事にさせるとか。先生によって違うけど、こういう音がしたら止まりましょうとか、口を閉じましょうとか、先生を目と耳でみましょうとか。そういうちゃんと伝わる基礎というか。

高学年の音楽は積み上げをしていたら、曲のバリエーション、指導のバリエーションも広がる。そこを収縮して上ってきていないと、とても狭き楽しみ方になる。鍵盤ハーモニカなど技能面の基礎技術を着実に身につけて上に上げていかなければいけないと思う。

- 学年をつないでいくという事が難しいです。音楽は特に。算数、国語は系統性を立てて…きちんとできているが、音楽でそれをきちんとしている人は少ない。学校全体で考えると、低学年はここまでの力を付けさせて、高学年はこれだけの事をやってという、そういうものをきちんと持っている学校は少ないと思う。逆に言うと、できる教員がないという事です。したいのは山々だけど。難しいところです。

### ⑬その他

- 専門性が身につけていたら良いと思う。小学校の場合、誰も音楽をしなければならぬ運命なので。専科がない限りしないといけないので。技術があったら、それだけでも違う。ひきつけられる。
- 夏休みに指揮法を習いにいったりしました、でも身には付きませんでした。難しいですね、ただ振ればいいだけじゃないし。
- 私は音楽がとても苦手で、出来ることなら1年から専科の先生にずっとお願いしたいくらいの状況です。専科の先生が私の授業を見られたらびっくりされると思うのですが、基本的には音楽の指導書にそってしているし、発想の転換で音楽の時間で心を解き放すような時間とか、みんなと一緒に何かをして「ああ、楽しかった」と思うような時間にしてこうと気持ちを切り替えて、理論的にはびっくりされると思います。
- とにかく自分が積極的に外に出て行って、授業を見に行く、〇〇大学の研究授業だといったら見に行く、講習会といったら行く、というように積極的に自分が動いて取りに行かないと、音楽はお金もたくさん掛かるのですが、みんな自腹でいろんなものを買ってきて、交流したりもしますが、とにかく情報を取りに行つて、「あっ、これいいな」と思うものはやってみるとか、蓄積しておいて急にふっと思った時に「あっ、これやってみよう」ともいうのが出てくるので、その貯蓄で何とかやっているの、ほんとは実は音楽の「お」の字も知らないし、細かい音楽の要素というかエキスというようなものは全然

はっきり言って素人でわかっていないので、それでも授業していきますから。まあ他の先生たちもそうだと思うのですけれども、それで授業していくというか。

- 100人くらいの学校に行くと、ピアノを弾ける人がいなかったんです。だからまあピアノは弾けるじゃないですか。じゃあ弾け、ということになったら、もう何もわからなくても音楽担当。で、全体の音楽の合唱だとか合奏だとかとなるとそこへ「ヒュッ」と充てられるようになるんです。中途半端にピアノとか楽器が来ると、「あんた出来るんだろ」みたいに言われるんですね。別に何にも勉強してないんですよ。だけでももうそういうポジションになってしまう。逃げられないから勉強しなければいけない。そんなに音楽ばかりじゃなくて、他の教科を勉強したり国語の方を勉強していたけど、結局行きがかり上、音楽を勉強していかないといけなくなって。
- 担任がするのとしないのでは違う。今、6年生だが、担任がやると規律面ができていますので、音楽の授業をどうするかだけなので、ハンドサインだけ。音楽といえば音を出すだけと思って音楽室に来るが。楽しむのは良い事だが楽しみ方を知らない。
- 音楽、体育の出来る先生は何でもできると思う。体育は発達段階が一番分かりやすいと思う。その時に教えておかないと、高学年になってそれをやらせようと思っても、バランス感覚でいえば3歳~4歳の頃に改善させる感覚だとか、バランスを考えておかないと高学年になって改善させようと思っても出来ない。音楽でも低学年のうちこれをやっておかないと。一番良い例が歌が引き合いに出されるが、中学年の時まで歌わせておかなかったら高学年になって歌わない。
- クラスが下降状態に入ったら途端に、半年で「えっ」って。1学期は良かった、2学期になっておかしいぞと思って、疑いがなくなってきたなと思ったら学級経営がもう不振状態に入っているとか。そうやってきたらなんとなくこっちも声質だけでもわかってくる。それからグループで動かなくな

るし、固まってねえ。それから、女子集団とかあるじゃないですか、そこをどういうふうにはぐしていくか、学級経営にもかかわりつつ、ここはおかしいな、この人たちおかしいぞとかいうのも、音楽を一緒にしているとわかります。観面。

#### ⑭音楽の位置付け、大切にしていること

- 音楽でテンションを上げる事ができる。コミュニケーションが取れるので団結しやすくなる。特に1年生は学校に来るだけでしんどいという子が多いので、音楽は大切だと思う。音楽の授業の後は元気が出てくるので、次の授業を受ける時、楽しそうになるので音楽の力は大きいと思う。
- 子どもたちがどのように友達つきあいをしているか、人間関係を確認する場です。
- 的確な技術はなかなか自信がないというのもあって、しなければいけないこと、教科書に書いてあるようなことはきちんと伝えなくてはいけないけど、それよりはみんなで楽しく気持ちをだすとか、一緒に、そういう気持ちの時間にしていけたらいいなと思ってやっています。
- 楽しくやろうとは思っていますが、達成感を味わせたい。達成感を味わえるような内容とか指導法とかを考えてやっています。
- 受験にも何にも役に立たないとは思っていますが、やっぱり音楽は、算数は忘れても音楽でこんな歌を歌ったとかこんなことをしたというのは覚えていたり、生涯残っていくものだし、潤い、元気をくれるものだったり、自分の心を慰めるものだったりするので、音楽の授業や音楽をいろんなところで経験することで、自分の楽しみとして位置付けたら良いんじゃないのかなと。だから、あまりほんとはガミガミ言ったらいけないんですけど。そういうものになるようにということと、基礎基本を知っておく、音符の事とかいろんな事を知っておくことはマイナスにはならないので、いつか何か自分で演奏したいなと思った時にそれが役に立つことになると思うので、それも大切にしていけないといけないなと。音

楽家を作ろうとは思っていないので。

- 生涯学習の面から考えても、難しい事は出来なくていいので、楽しんで、自分もそうだが、小さい時、3年間オルガンを習った程度だが、専科の先生とレベルは違えども同じように楽しむ事ができる。最低限楽しむように基礎的な知識も付けながら、ずっと音楽に親しんでもらえるよう。
- 通過点だと思う。音楽に向けて頑張るのではなく、音楽活動を通して、心が解放され、潤うとか、響きあう心地よさを、子どもに抽象的な言葉で指導してしまうので良くないかもしれないが、気持ちの良い音をくださいと言ってしまいが。楽典には強い弱いか言葉があるが、音楽が生活の中で向き合っている種を小学生の時にはまいてやりたい。担任であったり音楽専科であったり、友達同士であったり、この学校なら、全校合唱の場であったり、きっかけは何でもよいが、きっかけづくりと言うか。完成形は難しいが、きっかけを与えたい。音楽に親しんで。
- 音楽でも一節吹けた、二節吹けたと言うように、合わせたらこんな事になったという達成感と喜びのようなものを感じる武器、ツールである。良くわからないけど楽しかったなと言えることがあったらいいなと思う。
- 音楽は総合的なものだと思う。音楽だけが飛び出ているのではなくて、そこで人間が育つ。私自身も勉強になっている。学びの場というか。
- 人間形成の一つとして大事にしていきたいと思う。

#### 4. 調査からの共通の問題点

- 弾き歌いができない、コードがわからない。
- 発声の仕方をどのように教えたらいいか。
- 伴奏が堪能でないでCDに頼る。
- 歌を歌う時、CDに頼ると音程、リズムが取れていない。
- 合奏をさせる時楽器の扱い方、奏法、編成、指揮がわからない。
- リコーダー、鍵盤ハーモニカを教える時の導入の仕

方、奏法、扱い方がわからない。

- 鑑賞の授業の扱い方が難しい。
- 評価の仕方がわからない。
- 専門的な事も必要であるが先ずはどうやって学習規律を良くさせるか。子どもへの関わり方。
- 低学年から高学年へとつないでいくにはどうしたらよいか。
- 音楽専科のいない小学校での音楽の授業への不安。
- 音楽が堪能ではないのに音楽の授業を行わなければならないという不安。
- 支援を必要とする子どもたちへの対応の仕方。
- 少ない授業時間で子どもたちをどのようにして引き上げるか。

#### 5. まとめ

小学校の現場では音楽を専門にしない教員養成大学で音楽を学んだ教師が音楽を教えている場合の方が多い。音楽を教える教師は低学年の担任教師、音楽を専門に学んだ音楽専科の教師、ピアノが少し得意で音楽が好きと言う理由で専科になってしまった教師、小規模で音楽専科のいない小学校で音楽は苦手だが専科をせざる負えなくなった教師とさまざまである。音楽を専門に学んだ音楽専科以外の教師はどの立場になっても音楽を教える運命である。

教員養成大学時代、音楽に関わる授業も少なくピアノも独学でというベテラン教師の多くが、現場に入ってから先輩教師に教えてもらったり独自で勉強をし、様々な手段を使いながらたくましく授業を行っている。一方内容に違いはあるが教員養成大学でピアノ、声楽など音楽に関わる授業を受講している若手教師は、授業でやったようだが覚えていないと内容はともかく、あまり身につけていない教師が多いように見受けられる。

教員養成大学で器楽(ピアノ)を指導している中で、将来教師を目指しているが、歌が歌えない、ピアノが弾けない、楽譜が読めないなど、小学校・中学校の音楽の授業を通して音楽の基礎を身につけていない学生が増えてきていると感じられる。『学習指導要領 音



楽』『A 表現』歌唱・器楽、音楽づくり（各活動に分けて書かれている）『B 鑑賞』の観点から見た、小学校教師に要求されている音楽的能力を持っていない学生が増えているようである。

現場で学ぶ事もさることながら、教員養成大学では音楽の基礎的能力を習得する事は必要であるが、教育現場で役立つ能力を養い、教師としての資質を身につける事が求められるのではない。

インタビューからわかるように音楽を苦手とする教師は多く、教師を成長させる場所は学校であると思うが、音楽については学校での授業研究、研修の場がほとんどない。研修会に参加しても教師自身が充分消化していないと子どもたちに伝えられない、伝わらないし実践の場とすぐに結びつかないというのが現状である。『学習指導要領 音楽』で小学校から中学校にかけての9年間の学習を引き継いでいくことが提示されている中、教師自身が子どもの反応を見ながら自信を持って授業を行うにはそれぞれの狙いを明確にし、教材研究をしっかりとすることが必要ではなからうか。しかしながら、現場の教師の多くは、日常の業務をこなしながら、手探りではあるが懸命に努力している事が読み取れる。

## 6. 結 び

インタビューを通して教員養成大学在学中にやっておくべき課題が明らかになってきた。

小学校教師は一人で何でもこなさなくてはならない。初任だからといって避けられないのである。学校によっては音楽専科がいたり、音楽の得意な教師に任せられるところもあり、それはそれで幸運のように見えるかもしれないが、赴任先の学校の規模や状況によって、一人で全教科をこなさなければならないのである。音楽が好きというだけで音楽の授業を任される場合もあるようである。

担任を持つと1つの教科をじっくり研究することも難しく、特に初任時は研修なども多くあり、思うように時間が取れないのが現状である。音楽の苦手な教師にとって大きな負担となる事も事実である。教員養成

大学で教えてもらった通りにはいかない。様々な場面に対応できるような指導が必要である。

採用されても用を供さなければ現場も困るし、音楽の授業が苦痛になれば本人もストレスになる。そして最悪なのは子どもにも良い影響を与えないことである。

現場で経験を積み重ねていく中で学んでいくことも多いであろう。しかし大学で学べることも数多くあり、学んでおくべきことは学び、少しでも活かせるように出来たら良いのではない。

指導する立場である筆者たちも、小学校の教育現場の現状を把握し、ポイントをつかんで学生に伝えていくことが重要であるが、どのような価値観を持って授業をするかということも大切である。さらに学生は自ら学んでいくことが望ましいと考えられる。教わる立場からではなく教える視点から学ぶと同時に、子どもの立場に立って授業を楽しめているか、自分も楽しんでいるか、そして楽しむためには音楽と向き合い深めることが大事である。

音楽は教師の気持ちがダイレクトに伝わる授業である。教える側が楽しそうにすれば子どもものってくる。苦手意識を持ったまま消極的に音楽の授業を行えば子どもの音楽に対する意識、感覚が変わり、気持ちさえも沈んでくるであろう。

音楽（特に合唱）の出来るクラスは他の授業でも成功すると言われている。無理なく自然に身に付けさせることが指導するうえでの最大のカギとなるようである。

## 謝 辞

本稿作成にあたり、お忙しい中、快くインタビューに応じてくださった小学校の先生方に深く感謝申し上げます。